

# 情報リテラシー教育における e ラーニング科目と対面授業科目のシナジー効果

中山幹夫 神田外語大学 外国語学部 国際コミュニケーション学科  
 e-mail : nakayama@kanda.kuis.ac.jp  
 吉永耕介 神田外語大学 外国語学部 国際コミュニケーション学科  
 井谷荘太郎 神田外語大学 メディア教育センター

## 1. はじめに

急速な発展を続ける情報技術の下、次々と新しい IT の活用形態やアプリケーションソフトが登場し、既存ソフトも使い易さを求めて絶えずバージョンアップが続いている。しかしながら Windows、Word、Excel、Power Point の習得や活用のための科目はもちろんのこと、アート系やデザイン系のように表現力や情報発信力に重点を置いたコンテンツベースの科目においてさえも、特定ソフトの操作能力習得のために多大な時間を費やしてきた。そのため目的に応じてどのように IT を利用するのかを判断し、ソフトの使い方も自らの力で習得できるような柔軟性のある情報能力の育成が不十分であった。本論文では、操作教育から脱却し、機器やソフトに依存しない能力育成としての情報リテラシー教育を実現する上で、e ラーニング科目と対面授業科目が共に高めあうシナジー効果について本学の実践を背景にして報告する。

## 2. 情報リテラシー教育が抱える問題点

### 2.1 情報科目の講座構成の推移

本学のコンピュータリテラシー科目は受講希望者が大幅に増加し希望学生を収容できない状況になっていた。また情報関連の他の科目でも授業の質の確保のために学生の基礎力向上が急務であった。しかしコマ数増加は必要以上に教員と設備の負荷を増やし、2006 年度から情報を必修で学んだ高校生が卒業する状況からもコマ数増加は適切ではなかった。

そのため e ラーニングを導入し情報基礎力の底上げを図り、一方で教員が対面教育で質の高い対応をすることが有効であると考え、WBT(Web-Based Training)による情報基礎の科目のトライアルを 2001

年度と 2002 年度に実施し、2003 年度から Word・Excel・Power Point、情報モラル、IT の基礎知識を e ラーニングで学ぶ科目、情報基礎 I、II を新設した。必修ではなく、全学を対象にした自由選択科目として実施した。それに伴い他の情報科目の新設も行った。2003~2004 年度における情報基礎 I、II の 2 年間の成果を踏まえて e ラーニング科目と対面授業科目の役目を見直し 17 年度から機器やソフトに依存しない情報能力を獲得する科目として情報リテラシー演習を新設した。情報関連科目の推移を表 1 に示す。

### 2.2 情報リテラシー教育の状況

2003、2004 年度の e ラーニング科目の導入により他の情報関連科目はより高度な内容にシフトすることができた。しかしながら、それでも対面授業科目において操作教育に授業の多くの時間を使っていた。コンピュータリテラシー科目では Word や Excel を使って学生個別の作品を作り上げる授業を進めたが、Word、Excel 自身の使い方にかかなりの時間を割かなければならない状況が続き、アート系やデザイン系の科目でもコンテンツベースとしながらも特定の画像ソフトの使い方の習得に多くの時間を費やしてきた。

しかし教員たち自らが IT を習得した経緯を振り返ってみると、業務や研究などの『必要性』から出発しており、しかも新しいソフトの習得も『独学』で『わずかな期間』で実現してきている。これこそ学生たちが将来社会に出て求められる力ではないだろうか。そして教員たちは『今の授業で、学生たちは将来仕事などの目的のために新たに必要になるかもしれない機器やソフトを自力で学ぶ力を身につけられているのだろうか』という疑問を抱えていた。

新しいアプリケーションソフトが次々と登場し既存ソフトのバージョンアップも進む中、特定の機器やソフトについての狭い知識は急速に陳腐化していくことは明白である。そのため操作教育から脱却し、機器やソフトウェアに依存しない情報リテラシー教育の必要性は感じてきたが現実には操作教育に多大な時間を費やす状況が続き、本来の情報リテラシーの育成が不十分になっていた。

### 3. 情報リテラシーを身に付ける方策

学生にとってみれば、分からないことはすぐに教員に聞く方が手っ取り早いし、教員にとってもそれが学生のやる気として感じられることが多い。また

表 1 本学の情報関連科目の推移

2001~2002 年度		2003~2004 年度		2005 年度~	
科目名	コマ数	科目名	コマ数	科目名	コマ数
コンピュータリテラシー I	12	コンピュータリテラシー I	10	コンピュータリテラシー I	6
コンピュータリテラシー II	12	コンピュータリテラシー II	10	コンピュータリテラシー II	6
		情報基礎 I	1	情報基礎 I	1
		情報基礎 II	1	情報基礎 II	1
				情報リテラシー演習 I	4
				情報リテラシー演習 II	4
その他 8 科目	13	その他 16 科目	20	その他 16 科目	24
合計 10 科目	37	合計 20 科目	42	合計 22 科目	46

授業をスムーズに進める上でもそのほうが好都合である。しかし操作が分からないからといって、すぐに教員に聞くという安易な手法で情報リテラシーが身に付くとは考えられない。むしろ教員は答えを教えずに学生に考えさせること、そして学生自身が自分で悩み考えることのほうがコンピュータを使いこなす能力の育成につながる。

そこで情報リテラシー教育の原則として下記の2点が重要である。前者は e ラーニングが担い、後者は対面授業が担うべき内容であると考えられる。

- (1) 情報リテラシー教育の基礎部分、すなわち IT の基礎知識、情報モラルなどの社会的知識、コンピュータの基本操作などを体系的かつ実践的に学ぶ。
- (2) 情報リテラシー教育における対面授業では、教員は機種やソフトに依存しない共通した内容を教え、課題作成でも自分で考え解決する力を育てるために具体的な操作は学生自身が見出すよう指導する。表現内容を重視する授業でも目的に応じて IT の活用方法を見出すための判断や指針を教え、学生が目的に応じて必要なソフトを自らが選択し使い方を探る力を身につけさせる。そこでは操作教育をできるだけ排除することが重要である。

以上の視点で、本学の情報教育のパイロットケースとして 2005 年度から国際コミュニケーション学科の学生を対象として以下の施策を実施している。

- (1) 全学対象の自由選択であった e ラーニング科目の情報基礎 I、II を、該当学科学生に対しては必修科目とした。それにより、該当学科の学生は全員が e ラーニングによって操作教育と情報リテラシーの基礎を体系的に自学自習で学ぶことになった。
- (2) 該当学科学生に対して対面授業科目の情報リテラシー演習 I (前期)、II (後期) を新設し、履修を必修とした。この科目では先に述べた原則に従い、Word や Excel のような個別ソフトウェアの使い方及び操作教育については極力教えないことにした。

#### 4. 全学での e ラーニング科目の導入の効果

全学での e ラーニング科目の導入によって希望する全ての学生は e ラーニングによって情報基礎能力を身につけることができるようになった。自由選択科目であったにも関わらず、2004 年度前期の情報基礎 I は新生の 79%(591 名)、在校生の 5%(121 名)が受講した。合計の受講者数は 712 名であり、この数は全学 3000 人規模の本学では卒業までに全学生の 9 割以上(=712×4/3000)が受講することになる数字である。単位認定率は全体で 85%、新生は 90%であった。後期の情報基礎 II では新生の 52%(397 名)、が受講した。合計の受講者数は 509 名である。単位認定率は全体では 78%、新生は 85%であった。

これほどの大規模な自学学習であるにも関わらず、2004 年度の情報基礎 II の授業内容についての満足度は図 1 に示すように『良い、とても良い』で 58%、『普通』も足すと 88%にも達している。学習効果のアンケートでも図 2 に示すように受講後は『少し

分からない、全然分からない』が激減し、『かなり分かった、よく分かった』が大きく伸びている。前期の情報基礎 I でもほぼ同じ傾向であった。

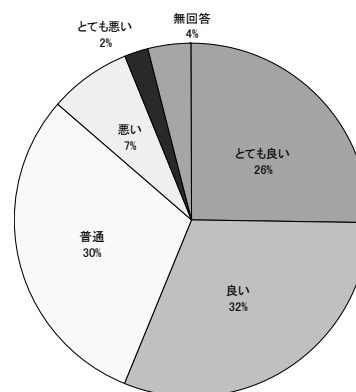


図 1 2004 年度情報基礎 II での授業満足度

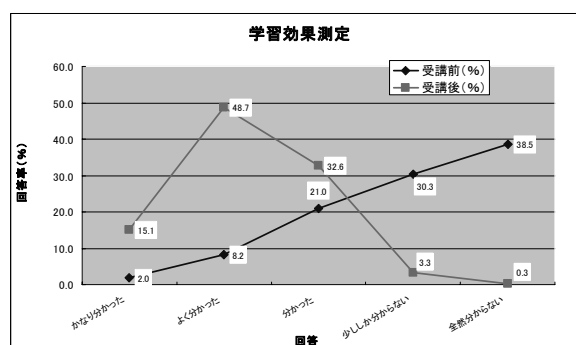


図 2 2004 年度情報基礎 II での学習効果

#### 5. 2005 年度の e ラーニングと対面授業の効果

国際コミュニケーション学科では本年度から e ラーニングを必修としたため、学科の全学生が情報基礎を履修しており、対面授業の科目である情報リテラシー演習においては操作教育を排除して IT 発展に柔軟に対応できる情報活用能力に焦点を当てている。

機器やソフトに共通する知識と、自らが IT の活用方法を見出す力に重点を置くことで、学生自身に考えさせるような授業を進めている。学生は最初は戸惑いながらも次第に自分で考えることの大切さを理解しつつあり、知らないソフトでも自分でメニューバーやヘルプから必要な機能を見つけ出せるようになってきた。また個別ソフトの雑多な機能の習得よりも情報の扱い方、ファイルの管理・整理の方がはるかに重要であることも理解するようになってきた。学生は e ラーニングで学んだこととの共通性を見だし高い応用力を身に付けつつあり、e ラーニングと対面授業科目のシナジー効果も明らかになってきた。

今後アート系やデザイン系の情報科目への適用も検討しており、語学教育などに適用すれば e ラーニングで語彙力、文法力、リスニング、リーディング、ライティング、スピーキングの基礎を養い、対面授業では語彙教育などを大幅に削減しディスカッションやプレゼンテーションなどの対人コミュニケーション能力育成に多くの時間を割くことができ、同様のシナジー効果が得られることが期待される。